
はじまりの恋。

佳那子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はじまりの恋。

【Nコード】

N0923Z

【作者名】

佳那子

【あらすじ】

春野みのり、15歳。初めて知った、恋の痛みと、喜び。もう人を好きにな리たくない、思っていたはずなのに。

プロローグ

「・・・あ、雪！」

修平くんが、空を見上げ、そういう。

その声で私も、修平くんと同じように空を見た。

灰色の曇り空から、はらはらと雪が舞い始めた。

静かに、どこか寂しげに。

・・・今年はじめての、雪だ。

私が手を広げると、手袋をはめている手のひらに、雪たちはぽつぽつと落ちてきた。

白い結晶が融けて、冷たい水滴になった。

そんな私を見ていた修平くんは、静かに微笑む。
そのどこか寂しげな笑みに、私の心は奥のほうから徐々に冷えていく。

「・・・みのり。」

「・・・なに？修平くん」

・・・そんな笑顔見せないでよ。
声に出さなくても伝わってくる。

修平くんからはすうつと、笑顔が消えた。

「・・・俺、好きな子ができた」

「だから、別れてほしい」

・・・ほら。

わかってたよ。

頬が冷たいのは、降り始めた雪のせいなのか。
私の涙なのか。

霞んで見えはじめる修平くんの顔。
そのとき、ふと思った。

修平くんって、雪みたいだな。

・・・こうやって、私の心をひきつけておいて。

・
・
・
すぐ消えちゃうの。

1・終わりの恋。

ざわざわ、ざわざわ。

受験が終わった後の、クラスの解放感はもの凄い。
それは私のクラスも同じだった。

「みのり、ついに明日だね！合格発表！」

「亜由・・・うん、そうだね」

「自信あり？」

「まさか！」

私がそう言ったと同時に、亜由は笑った。

私もあはは、と笑った。

受験直後にも、亜由に言ったけど、数学はダメダメだった。
面接だって、おどおどしちゃって、何も言えてない。

・・・って、笑ってる場合じゃないよ・・・私・・・。

「・・・みのり」

「ん？」

「大丈夫？」

「なにが？後期試験が？」

「とぼけてんじゃないっつもの・・・修平のこと」

亜由は、真剣な顔でそう言ってくれた。

思考が一瞬停止したけど、何とか笑顔は保てた。

「・・・べつに。いちいち気にしてないよ」

・・・私の強がりには、いつも亜由は気がついていてる。

「・・・そっか。そうだよみのり！高校にはもっといい男いるんだからね！」

「だ、だよね！」

「うちら頑張ろう！あんた、修平なんかよりいい奴、見つけなよ！」

「うん・・・」

だけど、それ以上追求しない亜由には、いつも救われる。

「ちょっとトイレ」

「オッケー」

私は席を立ち、廊下に出た。

・・・廊下に出ると、教室よりもっと賑やか。

いろんなクラスの子が集まって、おしゃべりしている。

私はふと、壁際に立っている一組のカップルに目がいった。

「もうー、修平ってば〜！」
「俺！？なんで！」

・・・修平くん。
笑ってる。
幸せそう。

また心が、キリキリと痛んだ。

私は二人から目を背け、トイレへと急いだ。

・・・振られた。

私は、修平くんに振られたんだ。
よりによって、私の受験前日に。
自分が私立の推薦で、通っちゃってるからって。

『好きな子ができた』

なによ、なによそれ。

今では、その『好きな子』とちゃっかり付き合っている。

ずっとそばにいてくれるって、言ったのにね。

修平くんが、私のすべてだったのに。

・・・裏切られたんだ、私。

大好きだった人に。

翌日。

私は学校が終わったと同時に、亜由と一緒に教室を飛び出した。

「みのりっはやく！合格発表、もうされてるよ！」

「待つてよ亜由ー！」

亜由の速い足に感心しながらも、自分の足の遅さを憎む。

靴を履いて、校舎内を出た。

学校の自転車置き場に、自分の自転車を見つけて飛び乗る。

亜由と一緒に校門を出て、目的地の『大江第一高等学校』まで、向かった。

「うっわあー！すごい人！」

「ほんとだ・・・」

自転車に飛び乗って、約15分。

私たちが受験した高校の、正門玄関にはたくさんの人だかり。

「こ、こんなんでも合格見ろって言われてもわかんないよ!」

「がんばろみのり!行くよ」

「えっ、ちよつと亜由!」

亜由は勢いでその人だかりに突進した。

私も、受験番号を持った手を握り締めて、覚悟を決め、その中に混じろうとした。

・・・が、失敗。

トロくて鈍臭い私は、人にぶつかって、その勢いで人だかりからはじかれた。

べちゃつと、地べたに叩き付けられた。

「い、痛い・・・、もう、最悪・・・」

立ち上がり、スカートを払う。

さあ、もう一度。

・・・そう思ったとき、受験番号の紙が手元にないことに気がついた。

「え・・・」

嘘！？

嘘、嘘！？

その紙は、もし合格した時に入学書類と共に送らないといけない。
なくしちゃったら、入学できない・・・。

ない、ない。

地べたに這いつくばって探す。
ない、ない、ない！

目頭が熱くなる。

どうしよう・・・紙、なくなっちゃった・・・。

修平くん・・・！

「ねえ、あんたの探しものってこれ？」

「へ・・・？」

突然頭上から降る声。

私は驚いて顔を上げた。

そこには、一人の男の子。

・・・中学生だ。

手には、私の・・・受験番号の紙を、持っている。

「そ、それ・・・!!」

「こんな大事なもんなくすなよ・・・ほら」

「あ、ありがとう・・・」

紙を受け取る。

手につい力が入って、くしゃくしゃに握りしめてしまった。
涙がぼたぼたと、落ちる。

「よ、よかった・・・本当に・・・ありがとう!」

「いーえ。んじゃ」

興味なさそうに、その言葉を残し、その男の子は去って行った。

・・・ありがとう・・・本当に・・・。

「みのりー!! あった!! あったよ!! うちら二人ともあった!!」

亜由の声が、聞こえる。

「え・・・ほんとう!?!」

「あった、合格したー!!」

亜由と抱きしめ合い、とびはねる。

それと同時に、さっきの男の子に心から感謝した。

「よかったよー、ほんと・・・」

「これで、うちら春からここの高校の一年生だよ!」

「うん・・・」

指先で涙をぬぐい、亜由と微笑む。

「頑張ったもんね」

「うん」

「みのり・・・」

「・・・うん」

これで蹴りがついた。

さよなら、修平くん。

そうすぐには、忘れられないだろうけど。

決めていたから。

修平くんと受けた私立には滑っちゃったけど、今回は合格したんだ。

これで本当に、修平くんとは・・・。

2月の終わり。

卒業式は、すぐ目前だ。

修平くんとはもう、進む道も別々だから。

私も、前へ進んでみるよ。

2・さくら。

それからの日々は、あまりにも早く過ぎ去った。

ほとんどの子が志望校に受かって、もう心配事はなくなったから。今までの中学生生活を振り返ることは、卒業式直前までしなかった。

・・・雪から、桜にバトンタッチ。

季節は確実に、変化している。

3月上旬。

私は、無事卒業式を迎えることができた。

『・・・春野みのり！』

「はい！」

マイクを通した担任の声。

返事をして席を立ち、壇上に上がって校長先生から卒業証書をもらう。

ああ、入学したことが、つい最近のことのよう。

そんなことを考えながら、卒業証書を受け取った。

証書には、達筆な字で私の名前が書いてある。

それを見ると、なんだかくすぐったいような、不思議な感覚に陥った。

私たちのクラス、3年3組が終わると、次は4組。

『東修平！』

「はい」

その名前と、声を聞いただけで、肩がびくつと跳ね上がった。

・・・長くて淡々とした式が終わり、教室へと戻り、先生の言葉をもらう。

涙ぐみながらも、最後のクラス写真を撮ったりして、別れの時を過ごした。

「みのり！写真撮ろう！」

「うん」

亜由は自分の携帯を手にもって、私の隣に並ぶ。

2、3枚撮って、それから皆で思い出づくりに卒業の歌を歌って、校舎を後にした。

「あー、中学生生活終わったー・・・」
「ねー。」

「みのり、高校からもよろしくね」

正門。

桜の花びらが、地面を絨毯のように、敷き詰めている。
卒業証書の筒を持って、私と亜由は話していた。

「ええ、こちらこそ！」

「みのり、やばいとか言いながら合格したし、安心したよ」
「あはは・・・」

奇跡だよ、そう付け足した。

だって、私と亜由が受けた高校は、県内の公立高校でもN O ・ 1を
争う学校だから。

必死になって勉強して、よかった。

私立落ちたときは、絶望したけどね。

「あ・・・」

「え？」

亜由がふと、私の肩越しを見る。

「・・・亜由、どうしたの？」

「あ、なんでもない」

「なに？」

私は気になって、振り返った。

・・・見なきゃよかった。
すぐ後悔。

「み、みのり・・・」
「・・・」

そこには、修平くんと・・・今の修平くんの彼女、佐々木美幸ちゃん
がいた。
美男美女。
お似合いだ。

ふたりとも、同じ高校に進学する。

こんな場面、見慣れたはずなのに。

諦めたはずなのに、何でまだこんな気持ちになるんだろう？

修平くんは、自分の学ランの第2ボタンをとって、美幸ちゃんに渡した。

美幸ちゃんは嬉しそうに、それを受け取った。

「・・・みのり」
「うん、わかってる」

あの日々の私たちはもういないだって。

今にも折れてしまいそうだったあの時の私を、支えてくれた修平くん……。

ありがとう。

最後に、心には修平くんを、修平くんだけを焼き付けた。

「……行こうか、亜由」

「……うん」

「よっしゃ、みのり、卒業プリ撮るぞー！これからゲーセン直行ー
！！」

「おー！」

私と亜由は笑って、正門を抜けた。
振り返りはしなかった。

まっ青な空。

強い風が吹いて、ピンクの花びらが青い空を彩った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0923z/>

はじまりの恋。

2011年12月3日23時48分発行